

Operation Raleigh News



Operation
Raleigh
DENSO

No.4 第4号

昭和60年(1985)1月5日(出)
毎月1回発行

●発行所 オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーミビル502号
電話 東京(03)544-7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

OR活動2年目に際して

ORJC オペレーション・ローリー日本委員会委員長

永井道雄

(国連大学学長特別顧問)



国際的な視野に立ち、世界の平和と人類の共存共栄への足場づくりのひとつとして活動が始まった「オペレーション・ローリー」はいよいよ2年目を迎えました。昨年11月英国を出航した旗艦サー・ウォルター・ローリー号は、合衆国ノースカロライナ州での公式行事に参加したのち、現在はパナマ諸島の学術調査、科学探検活動に参加しています。

「オペレーション・ローリー日本委員会」が派遣した日本の青年たちも9名がすでに約3ヵ月ずつ帆船ゼブ号への乗組み、あるいはパナマ諸島での活動などに参加しています。さらに本年中に21名の青年たちがコスタリカ、ホンジュラス、パナマ、ボリビア、ペルー、チリーなど中南米諸国へと旅立ちます。

また、1985年次派遣青年についても30名の募集がこの3月20日から開始されます。

「オペレーション・ローリー」は世界各国の青年たちが、サイエンスに、アドベンチャーに、ボランティアにひとつの目的に向かって協力し合い、大きな喜びを分かち合うものです。このすばらしい体験は、近い将来の国際社会のリーダーとなる青年たちを育てるに違いありません。サー・ウォルター・ローリー号の出航式でチャールズ皇太子は「オペレーション・ローリーにホリデーはない」とスピーチされましたが、まさしく参加者にとっては自らの思考力と体力の限界に挑むような厳しい毎日が続くことでしょう。

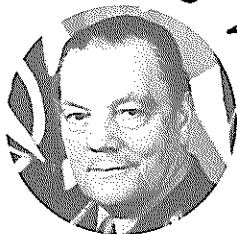
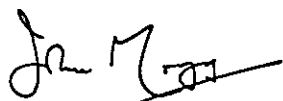
みなさま、どうかこの国際的な活動に今後もあたたかいご支援、ご指導をいただきますようお願い申し上げます。

◀フルセイルで航海する帆船ゼブ号



新春メッセージ

オペレーション・ローリー英国本部
評議会議長 ジョン・モック



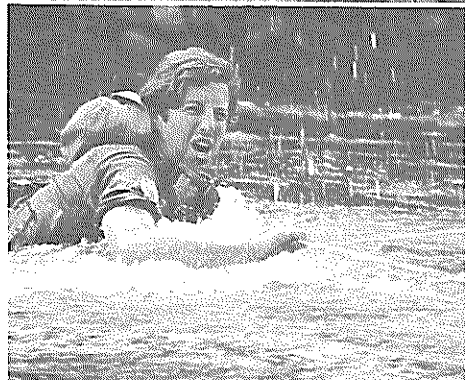
われわれの後援者であるチャールズ皇太子に代わって、さらにオペレーション・ローリーに参加している世界中のメンバーに代わって、心からのあいさつを送ります。

日本電装の協賛により、日本の派遣青年のためにORJCが行なった活動は際立ったもので、われわれすべてが賞賛と敬意を表しています。国際交流、理解そして若者たち相互の友情を広げようという共通の目的において、われわれが日本の若者たちと結束できたことは、とりわけ喜ばしいことです。

この探検に選ばれた日本の若者たちに心からお祝いを申しあげるとともに、彼らのオペレーション・ローリーでの活躍に期待しています。

科学と奉仕という2つの目的を通じて世界中の若者たちを結束させるという、このすばらしい探検への志願者は極めて多数のため、全員に参加してもらえないのが残念です。

みなさまの情熱と熱心な活動、さらに日本電装からの非常に好意的で寛大な援助には、とくに感謝にたえません。また関係者のみなさまの協力にも感謝しています。



ユートピア建設の哲理を

OR参加青年に期待する

ORJC実行委員 寺下英明 (日本青年海外派遣団青友会会長)

南海に浮上するパイアス国

諸君はパイアス国という名を聞いたことがあるだろうか。この国はすでに独立後13年を数え、毎秋南海に浮上する。国の青年国際交流事業のひとつに、東南アジア青年の船がある。パイアスとは、この事業の英文頭文字を逆読みしてラテン語のPious 神聖なる、と同音のPyaessと綴る。ORの母国、イギリスの思想家S・バトラーが、自らのユートピア論に、No-whereの逆読みによるエレホンという国名を冠したことに因む。



要は、ひらかれた青年国際交流による神聖なユートピア建設を希求してのパイアス国であり、すでに3千名余の青年市民が、アジア全域にその理想を定着させつつある。そして、このパイアスは、大いなるシンボルとして、この時代すべての国際交流、協力貢献のプロジェクトに普遍するものと信じている。

あと15年で到来する新世紀にかけて、国際共存の哲理を具体化しなければ、宇宙船テラ号は自滅する。これは「核」を手中にした現代の定理である。明日に生きる青年は、その意味で、自らがかわる国際プロジェクトは、お互いに握手し、理解し、容認し、さらに貢献の学習や作業を重ねるのみでなく、交流の苦心と歓喜の彼方に、真に力ある共存の哲理を、深くかつ具体的に手中にするものでなくてはならない。

あと15年で到来する新世紀にかけて、国際共存の哲理を具体化しなければ、宇宙船テラ号は自滅する。これは「核」を手中にした現代の定理である。明日に生きる青年は、その意味で、自らがかわる国際プロジェクトは、お互いに握手し、理解し、容認し、さらに貢献の学習や作業を重ねるのみでなく、交流の苦心と歓喜の彼方に、真に力ある共存の哲理を、深くかつ具体的に手中にするものでなくてはならない。

好運の女神に出会った諸君

ORプロジェクトは、世界の青年のものであり、その実際には多様な民族、文化、思想を体した青年群像の出会いがある。それ故に、新世紀の理想主義が、ユートピア建設諸策が、論ぜられ、構築される可能性が高い。極言すれば、その可能性こそが、この壮大なプロジェクトの、つとめて現代的なレーゾンデートル (存在理由) であるといいつめられてよい。

私は青春の日々、自らのあり方を「凛とした若者でありたし」とした。きりりとひきしまったさま、横溢する活気、欲望、探究心を持ち、明日の自分にゆるぎない自信をと期しながら、なお未完の恥らいと、他への慎しみを忘れない人間尊厳と冒険への夢を大切にした青春像。諸君は、いま、自らの未来に心中、何を標榜するのだろうか。率直にたずねたいし、同時に、個性研鑽の日々が、そのまま国際共存の哲理に重ねられる絶好の機会に際していることの素晴らしさについて、あらためて揚言したい。諸君はいま好運の女神に出会っている。

21世紀の大いなる海へ

過般、日中青年友好交流3千名の一団を引率して中国を旅したが、その国をあげての友好のプログラムの背景に、ぬぐいえない戦争の傷と、未来に突きささる核ミサイルの示威を見る。これが、現代の事実であり共通の苦悩である。そしてこのことがらは日中にとどまらない。思えば、人



パイアス国の関係たち (1975年、東南アジア船で各国ナショナルリーダーと) 右端が筆者

類史は文明の建設と破壊のくり返しであり、しかもその尖兵は常に若者であった。そして現に、なお多くの飢餓や衝突、殺戮、戦争が多くの青年に血を強いている。ちいさな戦いも全ての崩壊に直結しうるときはや、いかなる破壊も戦いも許されない。

されば、ORの参加青年、そして、この事業に目をむける全ての青年諸君、あらためて、諸君の心のうちなる、新しい時代のパイアス国の理想を、確固たるものとされんことを期したい。諸君の健闘をいのる。21世紀の大いなる海のために。

Bon voyage !

ORの躍進に期待する

ORJC オペレーション・ローリー日本委員会委員 田 辺 守

(日本電装株式会社取締役副社長)

共感を呼ぶ

ORのチャレンジ精神

一昨年秋、英国のプリンス、チャールズ皇太子を後援者とし、4年間にわたって地球を一周する学術調査、冒険、ボランティア活動が計画されており、世界各国の青年たちをその活動に参加させたい、という話を聞いたとき、私自身が参加できるような興奮を覚えました。

安定した現代社会は、大変ありがたいことであり、この恵まれた環境が大切なものであることはいまでもありませんが、一方で人間らしい冒険心やチャレンジ精神が見失われつつあるようにも思えます。このような現代社会の課題に対して「オペレーション・ローリー」は解決策のひとつであり、多くの人々の共感を呼ぶのではないかと考えました。

大きな収穫期待できる 学術調査のアシスト

さらにオペレーション・ローリーは4年間にわたって、海洋科学探査を始め、学術的にも価値の高い活動が計画されています。すでにバハマ諸島での調査、研究が行なわれているということです。参加青年たちは世界でもトップレベルの学者たちによるこの学術調査をアシストするこ

とで、大きな知的、人格的収穫を得ることができると思います。

「オペレーション・ローリー」にはさらに、開発途上の国々を訪ねて医療活動やボランティア活動を行なうことも計画されています。世界各国から参加した同世代の仲間たちとともに、これらの活動を通じて相互理解を深めようというねらいは、まさに真の



国際的な協調精神を育てる機会ではないかと思います。

OR協賛を誇りに思い 国際交流の成果を望む

たまたま本年は「国際青年年」ということで、世界中でさまざまな記念事業や国際交流事業が企画されています。わが国でも青年を中心とした各種の事業が注目を集めるものと思われます。「オペレーション・ローリー」はこれらの事業に先駆け、しかも極めてスケールの大きな、質の高い事業であるといえます。

このような事業に協賛できたことを誇りに思うとともに、今後も「オペレーション・ローリー」の成功を願い、微力を尽していく所存です。

●●紙上より年賀のあいさつをお届けします●●

謹賀新年

1985 元旦

1984年次、日本代表派遣青年30人。地球サイズの冒険心にあふれた若者たちは、すでに旅立った者、これから出発する者とさまざまですが、そのころはひとつ。
「地球こそ、わが舞台」



OR派遣青年に選ばれて——筒井正幸 (JP00119)

「1985年4月、パナマ行き」の辞令を受けてから、早や半年かたとうとしています。この間、ORニュースで報じられましたとおり、様々できごと、情報交換がありました。それらを大ざっぱに振り返って、個人的な近況を述べてみたいと思います。

まず、実際に代表に選ばれた瞬間から、多くの不安・不満に襲われました。英会話能力に自信がないことから、パナマに関する情報の絶対的不足、果ては大学卒業のことまで。最初のうちは、迷いが生じ手つかずの状態でしたが、今では、割りきってやれることからやるようになりました。まず何かアクションを起こせば、

それを修正していくことによってベストに持っていけると思うからです。また、今度の派遣によって得られるものと、その代償として失われるものについて考える余裕も、近頃出てきたと思います。出発3ヵ月前になって、やっと腹をくくったとでもいましょうか。

派遣が決まってからも、自分としては出発までの日々をOR一色にぬりつづす気はサラサラなく、旅行など結構好きなことをしているつもりです。しかし、考えたり行動する際にやはり派遣のことが心の隅にあり、私の生活全般の規範となっていることを常に感じているのも事実です。

出発が近づくとつれ、その自覚は強くなりつつありますが、自分がこの派遣に応募した動機を忘れず、すべてを背負って出発までの日々に色々なことがやれたら——と軽く考えています。

ゼブ号・リスボンから便り

桃井君は、ロンドンからリスボンへのセイリングで5日間ほど激しい船酔いに見舞われ、ダウン寸前。彼にとっては人生観が変わるほどの体験だったようです。一方、松井君は船酔いに悩まされてはいらぬものの、イルカを眺めたり、星空を楽しむなど多少余裕があるようです。

3月20日から募集開始

1985年次OR日程決まる

1985年次オペレーション・ローリー日本委員会の活動計画(予定)がこのほどORJC事務局から発表されました。

それによると、1985年次日本代表派遣青年の募集は3月20日(木)から5月31日(金)まで。3次にわたる審査のうち、30人の合格者が9月10日(火)に発表されることになっています。さらに10月19日(土)20日(日)の両日には、合格者30人を対象としたオリエンテーション(合宿)が丹沢で行なわれる予定です。

●主なORJC活動日程

- 3月20日(木) 1985年次日本代表派遣青年(30人)募集開始
- 5月31日(金) 応募締切り
- 6月20日(木) 第1次合格者発表(書類審査)
- 7月6日(土) 東京、名古屋、大阪で第2次テスト(体力・泳力を中心とした審査)
- 7月14日(日) ORシンポジウム'85
- 7月23日(火) 開催(東京)



主催/朝日新聞社
ORJC
後援/外務省
英国大使館
協賛/日本電装(株)

- 7月26日(金) 第2次合格者発表(体力テストの結果)



この時点で、合格者に「論作」を課す。

- 8月24日(土) 東京、大阪で面接、英語力、協調性などの適性審査
- 9月1日(日) 最終合格者(30人)発表



- 10月19日(土) 派遣青年送り出しパーティ
- 10月20日(日) およびオリエンテーション(丹沢合宿)



※写真はいずれも昨年のものです。

1陣・2陣とも 帰国は1月中旬すぎ?

松井・桃井両君が乗組んでいる帆船ゼブ号は、英国出航が10日間ほど遅れ、しかも風の状態が悪く、当初の予定より約3週間遅れで、1月4日頃グランドターク島に着くということです。この情報は、ゼブ号からの無電を、12月中旬にS.W.R.号がキャッチしたもので、第2陣の橋本かおりさんからの国際電話で判明しました。

S.W.R.号は、すでにノースカロライナでの公式行事を終了し、フロリダのマイアミに停泊中。結局、第1陣、第2陣の帰国は1月中旬すぎで、ほぼ同じ時期になりそうです。

「2年目のジंकス」は許されない

ORJC事務局長 牧野勇治

オペレーション・ローリー日本委員会の活動はいよいよ2年目に入り、事務局業務も本格化してまいりました。すべてに初めての体験にもかかわらず、今日まで大きな事故もなく過ごすことができたのは、全国で私たちを励ましてくださった方々のご協力の賜と深く感謝いたします。どうかこれからも、変らぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

すでに昨年選出の30名の代表の中には、活動を終えて帰国の途についている人もあります。スケジュールは遅れましたが、帰国第1陣の彼らに会うのは、とても楽しみです。

冒険に事故はつきもの、というのは他人の行動を見ている場合のことであって、当事者である現在はとてもそんな心境にはなれません。成田で見送ったときの笑顔が、たくましさを増して帰ってきてくれるものと期待しています。

日本代表が立派にその役割を果たしたことを報告できて初めて、オペレーション・ローリー参加の意義がすべての人々に理解してもらえるのだと思います。そのとき、私たち事務局員には、新たな力が湧いてくるでしょう。

一年間を振り返ると、実にいろいろなことがありました。反省点もいろいろあります。PRが不十分だったこと、代表青年のご家族に的確な情報を提供できなかったことなど…。

今年の事務局の最も重要な仕事は、ロンドン本部から状況の変化を正確につかみ、これを留守宅に逐一伝えること。この作業は、代表青年が発発、到着を繰り返すようになるこれからのために大切です。

さらに今年次の代表の選考。昨年の代表たちに、精神的にも肉体的にもひけをとらない青年たちを選ばなければなりません。そのために昨年の選考方法をさらに改良したプログラムで臨みます。

そして、昨年とは異なった角度からの組立てが要求されるシンポジウム……。まだまだ抜けていることはあります。その点はこれまで以上に多くの人々から指摘をいただきたいと思っています。わが事務局に「2年目のジंकス」は許されないのですから……。